SAPPORO 教区 NEWS
第21号
2014年1月1日
発行：カトリック札幌司教区事務局広報部
〒060-0031 札幌市中央区北1条東6丁目10
Tel. 011-241-2785 ／ホームページ：http://www.csd.or.jp

主の御降誕を心よりお喜びを申し上げます。

二〇一四年　年頭司牧書簡
＝司祭中心の教会から信徒中心の教会へ＝

教区の皆様に新年のご挨拶を申し上げます。司教叙階から二ヶ月が過ぎましたが、このふた月あまりは、挨拶回りに専念したと言って良いかも知れません。そして、これからも毎週日曜日の小教区訪問という形で続けていく予定です。出来るだけ早いうちに教区内のすべての小教区や修道院を訪問したいと願っています。

さて、札幌教区はご存じのように多くの課題が山積した状態です。それらをそのまま引き継ぐ形で私は教区運営を任されました。しかし、叙階式やその他の場で申し上げていることですが、私にはそれらすべての課題について適切な解決策を提示できるほどの見識を持ち合わせていません。解決のためにはそれぞれの分野で専門的な知識や経験を持った方々の協力が不可欠です。まずはその為の体制を作るために、教区顧問会を発足させました。次に教区司祭評議会、宣教司牧評議会を招集する考えです。さらに、これら従来の教区運営の基本的な枠組みに加えて、専門知識のある信徒や修道者を加えた課題に応じた諮問委員会に当たるものを作っていきたい考えです。今回は、個々の課題について具体的に書きあげる前に、教区運営に当たりまず私の基本的な考え方を皆さんにお伝えしたいと思います。

第2バチカン公会議以後50年、今回の表題「司祭中心の教会から信徒中心の教会へ」の表現はお題目のごとく、今まで何度も繰り返されてきました。やがて、司祭が減少しはじめ、更に大きな声で叫ばれるようになりました。それでいながら、いよいよ司祭が不足し、一人の司祭が3～4の小教区を兼務する事態になってきてもなお、現実はまだまだ司祭中心の教会であり、**信徒はその指示によって動くアシスタント**の役割の域を出ていないところが多いように見受けられます。

しかし、多くの司祭は決して暴君のごとく教会を支配しているわけではありません。司牧者としての使命を忠実に果たそうとして、献身的に教会と信徒に奉仕しています。しかし、その献身的な配慮が信徒の自立を妨げていることもあるのです。

これまで、教会をどう運営していくかという共通のビジョンが教区になかったので、小教区の運営はそれぞれの地区に任され、多くの場合、教会運営はそのときの主任神父のやり方に依存していました。そして、**司祭によってそのやり方が異なるので主任司祭が替わるたびに教会の運営方針が変わり、教会の雰囲気さえも変わってしまう**ことが多かったのです。

教会をその時々の司祭の色に染める。それは司祭が一番してはならないことと私は考えています。それぞれの教会の共同体の個性を生かし、その共同体独自の色を醸し出し、伝えていくことこそが大切なことです。司祭が変わるたびに教会の雰囲気が変わるようなことは、本来避けるべきことなのです。多くの教会では何についても司祭の決済と指示を求めます。**「神父さんが決めてください。そうすれば誰も文句言いませんから…」**。これまで赴任した多くの教会でこの様な言葉を聞きました。これらの言葉、裏を返せば、自分たちでは決めたくないし、責任も取りたくない。たとえ失敗してもそれは神父さんが決めたことだから…、という事になります。そして、不満があっても、それは決して神父の耳に入らない不平のつぶやきとなります。やがてそれは教会を影

で支配する妖怪となるのです。

司祭はオールマイティーではありません、教会運営で生じる全ての事柄に通じているわけでもなく、全てに適切な判断を下せるわけでもありません。むしろそれぞれの分野で、司祭よりも専門的な知識や経験に富んだ信徒が必ずいるのです。私の考えは、**信仰における重要な事柄、典礼や秘跡の本質的な事**にかかわること以外は、教会運営その他の事柄に関して、信徒が自分たちで責任を持って考え決めていくべきであるということです。

すべてを自分で決めてしまうことは司祭にとっても楽なことであり誘惑です。そうして小教区を自分の居心地のよい「城」にしてしまうのです。信徒にあっても考えずに従っている方が楽ですし、何でも頼れる神父になればそこから「うちの神父」という愛着に似た感情も形成されていきます。しかし、このことこそ、前任の地主司教様が以前の年頭司牧書簡で脱皮するようにと述べられていた「うちの神父さん」「小教区中心主義」の発想の元なのです。

最終責任は全ての点について主任司祭にあります。しかし、それは全てを司祭が判断し決めるということを意味するのではありません。**司祭が変わっても、変わることのないビジョンを持ち続ける為に、教会の信徒が、共同体として責任を持って向かうべき方向性を自分たちで選択し実行していくことが大切なのです**。そのためのヒントや提言を与えること、それが司祭の役割と私は考えています。

信徒の役割は洗礼によって与えられたイエスの王職・預言職・祭司職にあずかる者として与えられた固有の使命を果たすことです。教会の管理運営、要理担当や信徒の生涯養成、典礼における奉仕等、司祭からの委託ではなく、キリストから委託されたものとして、固有の召命に生きる信徒が求められています。その為には、必要であれば司教によって奉仕者の任命を行うことも検討する考えです。信徒は司祭の指示に従うアシスタントではなく、司祭修道者と共に協働者としてチームを組み、責任を持って宣教司牧に取り組んでいくことがこれからは求められます。その延長上に将来必要であれば、終身助祭制を取り入れることも考慮する時が来るかも知れません。語るべき重要課題はたくさんありますが、今回は上述の基本的な考え方を皆さんに理解していただくことにとどめたいと思います。

二〇一四年一月一日

札幌司教　ベルナルド　勝谷　太治

◆６月22日に教皇フランシスコが、教区司祭のベルナルド勝谷太治神父を札幌教区司教に任命
◆被選司教になられ、モットー「力は弱さの中でこそ十分に発揮される」（Ⅱコリ12：９）を発表

■モットーと紋章を決定

札幌教区の新しい司教に任命され、教区の皆様には初めてご挨拶申し上げます。

まだ自分に何ができるのか、何をすべきなのか、立ち位置が良く分からない状態の中にいますが、徐々に司教とはなんたるかを学んでいきたいと思っています。任命を受けてから、様々な準備に追われて時が過ぎ、もう叙階の日が間近になっています。しかし、いまだに夢の中を漂っているような非現実感を味わう一方、受諾したことの重大さに逃げたくなるような現実感にもとらわれています。良き牧者となることができるよう、皆さまの祈りと支えをお願いしいたします。

司教に任命されてすぐに決めなければならなかったことは「紋章」とそれに用いる「モットー」です。モットーは通常聖書から引用します。私がすぐに思いついたのは、司祭叙階式の御絵に使った言葉、「神は知恵あるものに恥をかかせる為に、世の無学なものを選び、力あるものに恥をかかせるため、世の無力なものを選ばれました。」Ⅰコリ１：27です。これは、私が司祭叙階を間近に控えて、自分は司祭にふさわしくないのではないかという思いにとらわれていた時に、深く味わうことができたみことばです。自分の力や能力に頼るならば、自分の力や能力以上のことはできない。しかし、司祭として歩む道は人の力によって成し得るものではなく、無力ではあっても、その自分を捧げたときに、その自分を通して、自分を超えて神が働かれるのだ。そう確信させられたのです。

今、司教職を受諾するに当たって、これは自分が選んだ道ではないという思いはあります。しかし、同時に選びようのない現実として示されたものと確信しています。そして、自分が選びようのない現実の前に立たされているのなら、それは「召命」なのです。「やらなければならないのなら できる」、これは、学生時代のモットーでした。神がそう生きるように召しておられるなら、いかにそれが自分の能力を超えているように見えてもできる。神が、必ず必要な助けを与えてくださるから。たとえ失敗することがあっても、それも神の計画のうちにあり、必ず意味がある未来へと繋がっていく、そういう確信です。司祭になる時に聖句を選んだときの思いがよみがえってきました。「あるべき自分が召されているのではなく」、弱さをいっぱい抱え持った「あるがままの自分が召されているのだ」と。

紋章に用いるモットーは短くなければなりません。そこで、上述のことをすべて包含したみことば、「力は弱さの中でこそ発揮される」を用いることにしました。そして、これは日本の社会にあって、取るに足りない、無力に見える存在である私たちキリスト者の共同体を意識してのみことばでもあります。紋章のデザインに用いたイメージも壊れやすい繊細な雪の結晶に小さな共同体である北海道の６地区を象徴させました。白い雪の大地に復活のキリストを象徴する十字架がしっかりと立ち、繊細で壊れやすい雪を際立たせ、聖母の象徴である星がそれを導く、そのようなイメージとしました。

◆司教叙階式を10月14日（月）に藤学園講堂にて教皇大使・司教団20名、司祭・修道者・信徒約2,000名が列席し、岡田東京大司教の主司式で厳かに執り行われる
◆式典に引き続き藤女子中高体育館にて祝賀会が多くの方々が参加し行われる

①　任命書（Bulla）を読み上げる教皇大使

②　叙階式で司教団全員から按手を受ける

③　岡田大司教から福音書を授かる

④　叙階式でミトラ（司教帽）を授かる

⑤　叙階式でバクルス（牧杖）を授かる

⑥　司教叙階後にミサ司式する勝谷司教

⑦　祝賀会で神学校時代を思い合唱する司教司祭団
さらに、勝谷司教から自作自演で歌が紹介される

◆教区宣教司牧評議会準備会を振り返って

5月　日午後からと6月1日午前中にかけて、教区内の各地区代表の20名の司祭・修道者・信徒が集い、これからの札幌教区のあり方について意見交換を行った。

開会にあたり菊地司教は次のように語られた。

ベネディクト16世が退任し、新教皇フランシスコが誕生したと言うことで、信仰年が霞んだ感があるが、教皇庁は信仰年に力を入れており、教皇と同日同時刻に一緒に司教たちは聖体礼拝をするようにとの指示がきました。日本は7時間時差があるので24時となるので、各カテドラルで夕方5時から行うことになった。アジアの国々では同じ時刻にあたる24時に行う国もあるようである。

ベネディクト16世を選出した前回のコンクラーベは、ヨハネ・パウロ2世の教皇在位が長期に及び、コンクラーベの様子を知っている枢機卿が居なくなっていたので、方法論的にどう選ぶか話し合う必要があったが、今回のコンクラーベはそれと違い方法論的な話し合いは不要で、今抱いている危機感が語られ、行政庁の消極的なことやコントロールしすぎる中央集権的な問題が浮き彫りになった。そして、司教の協働性をもっと考えるべきとの指摘がなされた。勇気をもって一歩外に踏み出そう。誰のために宣教を行うのか？…それは弱い人々のためである。このことを強く打ち出そうとした。その結果、新教皇はシンボライズな8人の枢機卿会を作り、協働することを強く打ち出した。どう証ししていくのか。証しするためには自分がシッカリとしたものをもっていることが重要。それでは、何を持っているのかを考え、受け継いできた信仰をどう証ししていくのかを考えた時、年頭司牧書簡にも書きましたが、3つの問いかけになる。第一に何を証しするのか。第二にどうして証しするのか。第三にどのように証しするのか。ということである。信仰年の間に、少しでもこの3つの問いに応えられるように持っていければと思っています。

教皇フランシスコは、素晴らしい信仰の証しとして、日本の殉教者や隠れキリシタンを引用しています。日本の教会の歴史を振り返りながら、信仰を証しすることは大切な事。召命の問題でも、札幌教区には現在3名の神学生がいるが、入学後6年間神学校で勉強する。教区で神学校に推薦するまでを含めると更に1年以上の期間が必要になります。合計10年位が必要となります。

司祭が少なくなってしまった時、我々は教区・教会をどう運営していくのか。自分たちの信仰だけでなく、周りの人々と信仰をはぐくみ、どう伝えていくのかを考える時期に来ている。

フランシスコ会も縮小傾向にあることは事実。どうしたら良いか共に考えていきたいと思いますと語られた。

話し合いを振り返ってみると、6地区の現状として、それぞれ形は違うが、地区の特色を生かしながら、テーマを設けて信者が集まり、一致できるように福音宣教活動を行ってきた感はある。しかし、札幌教区の特異性はあるとして、教区単位で一致した福音宣教活動を行ってきたかというと、その実感も意識も乏しいような気がするというのが大方の意見だった。昨年度の集まりから、教区としてのつながりを大切にして福音宣教していこうと身近な人たちとは話し合って努力している。司祭が少なくなり、集会祭儀の機会が増えミサに対する渇望が出てきている。都市部と地方では自ずと状況が違っているので、同じような活動は出来ないが、信徒だけで間違った方向に行かないように気を使っているなどの意見が出された。

教区としての意識や、つながりを持つために、このような意見交換の場は不可欠で、定期的に行われるべきではないかと思われた。

札幌教区の現状を鑑み、教区として一つになって、キリストの福音を宣べ伝えるために、共に歩んで行く共同体を築くための大切な時期に差し掛かっているような気がしてならない。

◆2013年青年の活動

◆WYDリオデジャネイロ大会が開催される

ワールドユースデー（WYD）は、国連が1985年を「世界青年の年」と定めたことを受け、前年1984年「あがないの特別聖年」の閉会ミサで、教皇ヨハネ・パウロ二世が、青年たちにローマへと集うように呼びかけたことにはじまります。

その後、毎年「受難の主日（枝の主日）」が「世界青年の日」と定められ、教皇庁信徒評議会が主催し、2～3年ごとに世界各地でWYDの世界大会を開催。今回のリオデジャネイロ大会は世界大会として13回目、WYDとしては28回目。

2013WYDは、教皇フランシスコの司式により、2013年7月27日（土）午後7時30分（日本時間7月28日午前7時30分）から前晩の祈り、7月28日（日）午前10時（日本時間同日午後10時）から大会閉会ミサが、ブラジル、リオデジャネイロのコパカバーナ海岸で行われました。

WYD前晩の祈りには約200万人の青年が参加

教皇フランシスコは前晩の祈りの中で次のように語りかけています。

ここにおられる皆様を目にしながら、わたしはアシジの聖フランシスコの話を思い起こします。フランシスコは十字架の前で、こう語りかけるイエスの声を聞きました。「フランシスコよ、行って、わたしの家を修復しなさい」。若いフランシスコはすぐに寛大な心で、わたしの家を修復しなさいという主の呼びかけにこたえました。しかし、家とはどの家のことでしょう

か。フランシスコは少しずつ、これは石でできた建物を修復することではなく、教会生活で自分の務めを果たすことだということを悟っていきました。それは、教会に奉仕し、教会を愛し、キリストのみ顔をますます輝かせなさいということだったのです。

今日も主は、ご自分の教会のために、皆様若者を必要としています。親愛なる若者の皆様。主は皆様を必要としています。今日も主は皆様一人ひとりを招いておられます。教会の中でわたしに従い、宣教者となりなさいと。親愛なる若者の皆様。主は皆様を招いています。群衆ではなく、皆様一人ひとりを招いています。主が皆様の心に何を語りかけておられるか、耳を傾けてください。わたしたちはこの数日間の出来事から、何かを学べると思います。わたしたちは悪天候のためにグアラティバの「信仰の畑（Campus Fidei）」でこの前晩の祈りを行うことをあきらめなければなりませんでした。主はわたしたちに語りかけておられるのではないでしょうか。あなたがたこそが真の「信仰の畑」です。「信仰の畑」とは、場所のことではなく、あなたがたのことですと。そのことは本当です。わたしたち、皆様一人ひとりが、わたしも、すべての人が、「信仰の畑」なのです。宣教する弟子となるとは、わたしたちが神の信仰の畑であるのを知ることです。この「信仰の畑」というイメージから出発して、わたしは三つのイメージについて考えます。この三つのイメージは、弟子であり宣教者であるとはいかなることかをいっそうよく理解する助けとなるからです。

第一のイメージは、種を蒔（ま）く場所としての畑です。第二のイメージは、訓練の場としての畑です。第三のイメージは、建築作業としての畑です。

第一のイメージは、種を蒔く場所としての畑です。

わたしたちは皆、畑に種を蒔く人について語ったイエスのたとえ話を知っています。ある種は道端に落ち、ある種は石だらけのところ、あるいは茨の間に落ちて、育つことができませんでした。しかし、ほかの種はよい土地に落ち、豊かな実を結びました（マタイ13・1―9参照）。イエスご自身がこのたとえ話の意味を説明します。種はわたしたちの心に蒔かれた神のことばです（マタイ13・18―23参照）。イエスは毎日、種を蒔かれますが、今日、特別なしかたで種を蒔かれます。神のことばを受け入れるなら、わたしたちは信仰の畑となるのです。どうかキリストとそのことばを人生に受け入れてください。神のことばの種を受け入れ、芽生えさせ、成長させてください。神はすべてのことを配慮なさいます。しかし、神に皆様のうちで働き、種を成長させていただこうではありませんか。

イエスはわたしたちにいわれます。道端や石だらけのところや茨の間に落ちた種は、実を結びません。わたしたちは正直に自問できると思います。わたしたちはどのような土地でしょうか。どのような土地になりたいでしょうか。自分が道端のようなものであることもあるかもしれません。わたしたちは主のことばを聞きながら、生活の中で何も変えません。自分が耳にするさまざまな表面的な声で耳が聞こえなくなっているからです。皆様にお願いします。そのような声にただちにこたえないでください。だれもが心の中でこたえます。わたしは耳の聞こえない若者だろうか。石だらけの土地のような者だろうか。わたしたちはイエスを熱狂的に受け入れますが、困難を前にしてひるみ、時流に逆らう勇気がありません。わたしたちは皆、心の中でこたえます。わたしには勇気があるでしょうか。それともわたしは臆病でしょうか。わたしたちは茨だらけの土地のような者かもしれません。後ろ向きな感情が、主のことばをふさいでしまいます（マタイ13・18―22参照）。わたしたちは心の中でどっちつかずの状態にあるのではないでしょうか。わたしは神に従っているのでしょうか。それとも悪魔に従っているのでしょうか。わたしはイエスの種を受け入れながら、心の中で育つ茨や雑草に水を注いでいないでしょうか。しかし今日、種はよい土地に落ちることができると信じています。わたしたちはどのように種がよい土地に落ちたかについて、あかしを耳にしました。「いいえ、神父様。わたしはよい土地ではありません。わたしは荒れ果て、石や茨だらけです」。表面的にはそうかもしれませんが、よい土地を少し見つけて、種を落とすなら、種は芽を出すでしょう。皆様がよい土地となりたいこと、「パートタイム」の、見かけだけのキリスト信者ではなく、真のキリスト信者になりたいことを知っています。皆様が、自由の幻想にまどわされ、一時的な流行や気まぐれに従うことを望んでいないことを知っています。皆様が高い理想、意味のある決定的な決断を目指していることを知っています。それは本当でしょうか。それとも間違っているでしょうか。わたしのいっていることは正しいでしょうか。もしもそれが本当なら、それを実行してください。沈黙のうちに自分の心を見つめ、イエスにいってください。わたしたちは種を受け入れたいと望みますと。イエスにいってください。イエスよ。わたしの中にある石と茨と雑草をご覧ください。しかし、種を受け入れるためにわたしがあなたに差し出す、わずかな土地も

ご覧ください。沈黙のうちに、イエスの種を受け入れようではありませんか。この時のことを忘れないでください。すべての人は自分が受け入れた種を知っています。この種を育ててください。神がそれを育ててくださいます。

第二は、畑は、種を蒔く場所であるだけでなく、訓練の場でもあります。

イエスはわたしたちに願います。生涯を通してわたしに従いなさい。わたしの弟子になりなさい。「わたしのチームで働きなさい」と。皆様の多くはスポーツを愛しておられます。ここブラジルでは、他の国々と同じように、サッカーは国民全体が愛するスポーツです。ところで、チームに入るようにといわれた選手はどのようにするでしょうか。彼らは練習しなければなりません。それもたくさん練習しなければなりません。主の弟子としてのわたしたちの生活についても同じことがいえます。聖パウロはキリスト者についてこう述べます。「競技をする人は皆、すべてに節制します。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするのですが、わたしたちは、朽ちない冠を得るために節制するのです」（一コリント9・25）。イエスはワールドカップよりも偉大なものをわたしたちに与えてくださいます。イエスがわたしたちに与えてくださるのは、実り豊かで幸福な人生の可能性です。さらにイエスは、ご自分とともに生きる未来、終わりのない未来、すなわち永遠のいのちを与えてくださいます。これこそがイエスがわたしたちに与えてくださるものです。しかしイエスはわたしたちに入会金を払うことを求めます。入会金とは、イエスに「かたどられる」よう訓練することです。それは、恐れることなく人生のあらゆる状況に立ち向かい、信仰をあかしするためです。イエスと対話し、祈ることを通じて。「神父様。わたしたちは皆、祈らなければならないのですか」。そうです。沈黙のうちにこたえてください。わたしは祈っているでしょうか。イエスと語り合っているでしょうか。それとも沈黙を恐れているでしょうか。心のうちで聖霊に語りかけていただいているでしょうか。イエスにこう祈っているでしょうか。あなたはわたしが何をすることをお望みですか。わたしがどのような人生を送ることをお望みですか。これが訓練です。イエスに祈ってください。イエスと語り合ってください。人生の中で過ちを犯したり、倒れたり、間違ったことをしたとしても、恐れてはなりません。イエスよ。わたしのしたことをご覧ください。わたしは何をすべきでしょうか。折がよくても悪くても、よいことをしたときも、悪いことをしたときも、たえずイエスと語り合ってください。イエスを恐れてはなりません。これが祈りです。皆様は、この祈りを通じて、イエスと対話すること、宣教する弟子となるための訓練を受けるのです。秘跡を通じて、イエスの現存がわたしたちの中でますます深まります。兄弟を愛し、聞くこと、理解すること、ゆるすこと、他の人を、だれをも除外せず、仲間はずれにせず、すべての人を受け入れ、助けることを学んでください。祈り、秘跡、他の人を助けること、他の人に奉仕すること――イエスに従うための訓練はこれです。

第三は、建築作業としての畑です。

わたしたちは目の前でこのことを目の当たりにしています。若者の皆様は、教会を築くという作業に献身しています。わたしたちの心が神のことばを受け入れるよい土地なら、キリスト信者として生きようと「汗を流す」なら、わたしたちは偉大なことを経験できます。わたしたちは独りきりではありません。わたしたちは、同じ道を歩む兄弟姉妹から成る家族の一員です。わたしたちは教会の一員です。若者たちは独りきりではありません。ともに道を歩みながら、教会を築いています。聖フランシスコがしたことをともに行います。すなわち、教会を築き、修復するのです。皆様に尋ねます。教会を築きたいですか。喜んでそうしたいですか。明日はこの「はい」という返事を忘れているでしょうか。この返事を聞いて、うれしく思います。わたしたちは教会の一員です。わたしたちは実際に教会を築いています。わたしたちは歴史の主役です。どうか歴史の末尾につかないでください。歴史の主役となってください。前に向かって歩んでください。世界をよりよいものにしてください。兄弟姉妹の世界、正義と愛と平和と兄弟愛と連帯に基づく世界にしてください。いつも前に向かって歩んでください。聖ペトロはいいます。あなたがたは霊的な家を造り上げる生きた石です（一ペトロ2・5参照）。この舞台を見ると、生きた石で造り上げられた教会の形をしているのが分かります。イエスの教会において、わたしたちは生きた石です。イエスはわたしたちに教会を築くように求めます。わたしたちは皆、生きた石です。建物の一部です。雨が降ったとき、一つの部分が欠けていれば、雨漏りがして、水が家の中に入ってしまいます。一つひとつの生きた部分が教会の一致と安定を支えるのです。わずかな数のグループから成る小さな教会堂を築いてはなりません。イエスはわたしたちに、ご自分の教会を大きくするよう願います。それは、全人類を収めることができる、すべての人のための家となるためです。イエスはわたしに、皆様に、わたしたち一人ひとりにいわれます。「行って、すべての民を弟子にしなさい」。今夜、イエスにこたえようではありませんか。はい、主よ。わたしも生きた石になりたいと思います。ともにイエスの教会を築きたいと思います。行って、キリストの教会を築きたいと思います。どうか一緒にこう述べたことを忘れないでください。

皆様の若い心は、よりよい世界を築くことを望みます。わたしは、世界の多くの場所で、若者たちが通りに出て、公正で兄弟愛に満ちた文明への望みを表明するニュースを耳にしています。通りを歩く若者たちは、変化の主役となることを望んでいます。どうか変化の主役となることを他の人に任せないでください。皆様こそが未来を手にしています。皆様を通して世界に未来が到来するのです。どうかこの変化の主役となってください。無関心を克服し、世界のさまざまな地域に生じている社会と政治の不安に対してキリスト教的な答えを示してください。世界の建設者となってください。世界をよりよいものと

するために働いてください。親愛なる若者の皆様。人生の傍観者となるのではなく、積極的にかかわってください。イエスは傍観者とならずに、自ら積極的にかかわりました。人生の傍観者とならずに、イエスと同じように積極的にかかわってください。一つの問いが残っています。わたしたちはどこから始めればよいでしょうか。だれから始めたらよいでしょうか。かつてある人がマザー・テレサに尋ねたことがあります。教会の中で何を変えなければならないでしょうか。教会のどの壁から始めるべきでしょうか。彼らは尋ねました。マザー、どこから始めるべきでしょうか。彼女はこたえました。あなたとわたしからです。彼女は目的を示したのです。始めるべきところを知っていたのです。今日わたしは、マザー・テレサのことばを自分のものとして皆様に申し上げます。どこから始めましょうか。あなたとわたしからです。一人ひとり、沈黙のうちに自問してください。わたしから始めなければならないなら、どこから始めたらよいでしょうか。一人ひとり、自分の心を開いてください。そうすればイエスは、どこから始めればよいか、語りかけてくださいます。

親愛なる友人の皆様。自分が信仰の畑であることを忘れないでください。皆様はキリストの競技者です。皆様は、より美しい教会、よりよい世界を築くよう招かれています。聖なるおとめに目を上げようではありませんか。マリアの助けによって、わたしたちがイエスに従うことができますように。マリアがご自分が神に「はい」と述べた模範を示してくださいますように。「わたしは主のはしためです。おことばどおり、この身に成りますように」（ルカ1・38）。マリアとともに、ご一緒に神にいおうではありませんか。おことばどおり、この身に成りますように。アーメン。

閉会ミサには300万人以上の青年が参加

教皇フランシスコは閉会ミサの説教で、「行って、すべての民を弟子にしなさい」。イエスはこのことばでわたしたち一人ひとりにこう語りかけます。「WYDに参加するのはすばらしいことです。地上の四方から集まった若者とともに信仰を体験するのはすばらしいことです。しかし、今、あなたがたは行って、この体験を他の人々に伝えなければなりません」。

イエスは、皆様が宣教する弟子となるよう招きます。今日、わたしたちが耳にした神のことばに照らして、主はわたしたちに何を語りかけておられるでしょうか。それは三つのことばです。「行きなさい。」「恐れるな。」「仕えなさい。」

1　行きなさい。リオでのこの数日間、皆様はイエスと出会うことのすばらしさを体験しました。皆様はともにイエスと出会いました。そして信仰の喜びを味わいました。けれども、この体験を、自分の生活、小教区、運動団体、共同体の小さなグループに閉じ込めてはなりません。それは燃え盛る炎から酸素を取り去るようなものです。信仰の炎は、分かち合い、伝えれば伝えるほど、強まります。こうしてすべての人が人生と歴史の主であるイエス・キリストを知り、愛し、告白するようになります（ローマ10・9参照）。

しかし、注意しなければならないことがあります。イエスは、「望むなら、時間があるなら」とはいわず、むしろ「行って、すべての民を弟子にしなさい」といわれました。信仰体験を分かち合いなさい。信仰をあかししなさい。福音をのべ伝えなさい――これが、主があなたがたを含めた全教会に示した命令です。しかし、この命令は、支配欲や権力欲から生じたのではなく、愛の力から生じました。まずイエスがわたしたちのただ中に来て、ご自分の一部ではなくすべてを与え、ご自分のいのちをささげたことから生じました。それは、わたしたちを救い、神の愛とあわれみを示すためです。イエスはわたしたちを奴隷ではなく、自由な人格、友、兄弟として扱います。そしてイエスは、わたしたちを派遣するだけでなく、わたしたちに同伴します。イエスはいつも、愛の宣教を行うわたしたちのそばにいてくださいます。

イエスはどこにわたしたちを派遣するのでしょうか。そこには境界も限界もありません。イエスはすべての人のところにわたしたちを派遣します。福音は、一部の人のためのものではなく、すべての人のためのものです。それは、わたしたちに近く、わたしたちを受け入れ、歓迎してくれるように思われる人のためだけのものではありません。それはすべての人のためのものです。行って、あらゆるところ、それも社会の周縁、遠く離れた人、わたしたちに無関心であるように思われる人にまでキリストをもたらすことを恐れてはなりません。主はすべての人を捜し求めます。すべての人がご自分のあわれみと愛の温かさを感じることを望まれます。

わたしはとくに、この「行きなさい」というキリストの命令が、ラテンアメリカの教会の若者のうちに響き渡ることを願っています。皆様は司教団が推進する大陸宣教に携わっておられるからです。ブラジル、ラテンアメリカ、そして全世界はキリストを必要としています。聖パウロはいいます。「福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです」（一コリント9・16）。ラテンアメリカ大陸は福音宣教を受け入れました。そして福音はこの大陸の歴史を特徴づけ、多くの実りを

もたらしました。今、この宣教は皆様にもゆだねられます。それは、福音がより新鮮な形で鳴り響くためです。教会は皆様を必要としています。皆様の熱意と創造性と、皆様の特徴である喜びを必要としています。偉大なブラジルの使徒である福者ジョゼ・デ・アンシエタ（1534―1597年）は、わずか19歳のときに宣教に出発しました。若者に宣教するための最良の道具は何だかご存じでしょうか。それはもう一人の若者です。これこそ皆様が歩むべき道です。

2　恐れるな。ある人はこう考えます。「わたしには特別な準備ができていません。どうして行って福音をのべ伝えることができるでしょうか」。親愛なる友人の皆様。皆様の恐れは、エレミヤの抱いた恐れとそれほど変わりません。エレミヤは預言者として神から召し出されたとき、皆様と同じような若者でした。「ああ、わが主なる神よ、わたしは語ることばを知りません。わたしは若者にすぎませんから」。神は皆様に、エレミヤに語ったのと同じことを語ります。「彼らを恐れるな。わたしがあなたとともにいて、必ず救い出す」（エレミヤ1・6、8）。神はわたしたちとともにおられます。

「恐れるな」。キリストを告げ知らせに出かけるとき、わたしたちに先立ち、わたしたちを導いてくださるのはキリストご自身です。弟子たちを宣教に派遣するとき、キリストは約束されました。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる」（マタイ28・10）。このことはわたしたちにとっても真実です。イエスは決してわたしたちを独りきりにはなさいません。イエスはつねにわたしたちとともにいてくださいます。

イエスはまた、「あなたがたの一人が行きなさい」とはいわれません。わたしたちは一緒に派遣されるのです。親愛なる若者の皆様。宣教において、全教会が同伴してくれること、そして聖徒の交わりを心にとめてください。一緒に困難に立ち向かうなら、わたしたちは強く、思いもよらない力の源泉を見いだします。イエスは使徒たちにばらばらに生活せよと命じたのではなく、集団を作るよう命じました。感謝の祭儀を共同司式する司祭の皆様にも申し上げます。皆様はご自分の若者たちに同伴するために来られました。若者たちと信仰体験を分かち合うのはすばらしいことです。しかし、これは歩みの一段階にすぎません。どうか寛大な心と喜びをもって若者に同伴し続けてください。若者が教会に積極的に参加するよう仕向けてください。決して若者が孤独を感じることがないようにしてください。ここでわたしは青年司牧を行うグループ、若者の教会体験に同伴する運動団体、新しい共同体に心から感謝申し上げます。皆様はきわめて創造的で大胆です。歩みを続けてください。恐れないでください。

3　最後のことばは、「仕えなさい」です。今朗読された詩編の冒頭は次のことばでした。「新しい歌を主に向かって歌え」（詩編96・1）。新しい歌とは何でしょうか。それはことばでもメロディーでもありません。それは皆様の生活の歌です。自分の生活をイエスの生活と同じにすることです。イエスの感覚、思い、行動を自分のものとすることです。イエスの生活とは、他者のための生活です。それは、奉仕の生活です。

聖パウロは今日の朗読箇所の中でいいます。「わたしは、・・・・すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです」（一コリント9・19）。パウロは、イエスを告げ知らせるために「すべての人の奴隷」となったのです。福音をのべ伝えるとは、神の愛を自らあかしすることです。利己主義を克服し、イエスがしたのと同じように、かがんで兄弟の足を洗うことによって奉仕することです。

行きなさい、恐れるな、仕えなさい――この三つのことばに従うなら、次のことを体験するでしょう。すなわち、福音宣教を行う者は、自ら福音化されます。信仰の喜びを伝える者は、喜びを受けます。親愛なる若者の皆様。故郷に帰っても、キリストに寛大にこたえること、福音をあかしすることを恐れてはなりません。第一朗読の中で、神は、エレミヤを派遣するとき、エレミヤに「抜き、壊し、滅ぼし、破壊し、あるいは建て、植えるため」（エレミヤ1・10）の力を与えます。皆様にも同じことがいえます。福音を伝えるとは、悪と暴力を抜き、壊す、神の力をもたらすことです。神の力は、利己主義の壁と、不寛容と、憎しみを滅ぼし、破壊します。新しい世界を植えます。親愛なる若者の皆様。イエス・キリストは皆様に期待しています。教会は皆様に期待しています。教皇も皆様に期待しています。イエスの母であり、わたしたちの母であるマリアが、その優しい心をもって皆様とつねにともに歩んでくださいますように。「行って、すべての民を弟子にしなさい」。

アーメン。

◆WYDinリオ(ブラジル)に参加して

真島　志門

主の平和。

私は、7月19日～31日に行われた、WYDリオデジャネイロ大会に参加して来ました。今回のWYDでの体験は、本当に忘れられない体験となりました。

巡礼の1～2日目は、サンパウロ市で過ごし、3日目から最終日まで本大会が行われたリオデジャネイロで過ごしました。

サンパウロでは、日系ブラジル人達の方々との交流があり、日系ブラジル人の歴史を学びました。

リオデジャネイロでは、司教様のカテケージス、赦しの秘跡、分かち合い、十字架の道行、等のプログラムを体験致しました。

そして今回、教皇様のミサで共同祈願をするという機会を与えて頂きました。

私が教皇ミサで唱えさせて頂いた共同祈願は、「様々な戦争や暴力の被害者に

なっている青年の為に祈ります。国々の間に平和が養われ続けます様に。私達の主に祈ります。」と御祈り致しました。

正直な所、教皇ミサでの体験は緊張しすぎて覚えていません。公式発表によれば、教皇ミサに参加した人数は350万人に上るそうです。

巡礼の日程をこなす中で、私は神様の存在を強く感じる出来事がありました。それは、私は教皇ミサの前日、練習の為一人でミサが行われる会場へ行き、その帰りに一人で日本巡礼団が滞在している教会に帰っている時の事です。帰り道に道に迷ってしまい、外観的にもあまり安全とは言えない地域に入ってしまいました。ウロウロと一時間ほど迷い、意を決して道を歩いていた夫婦に道を聞きました。すると、「ついて来なさい。」と言うのです。私は正直恐怖を覚えましたが、自分ではどうする事も出来ないのでついて行く事にしました。すると、バスに乗り、自分が滞在している教会に着いていました。私は、恐怖心を覚えた自分を恥じたと共に、その夫婦の方の笑顔に神様の愛を感じました。その夫婦の方と神様に感謝致します。

最後に、参加するに当たってご支援して頂いた札幌教区事務局の皆様、花川教会の皆様、２０１３ＷＹＤリオデジャネイロ大会日本事務局の方々、日本巡礼団の為に尽力して下さった皆様、共に日本巡礼団に参加した皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。神に感謝。

日本でもＷＹＤを開催

日程の関係でリオ大会に参加できなかった青年たちが集う

ブラジルで開かれたワールドユースデー（世界青年の日／ＷＹＤ）リオデジャネイロ大会と心を合わせて祈る催しが7月28日、名古屋市昭和区の神言神学院で開かれた（大会委員長・暮林響神父＝神言修道会）。

名古屋教区内のブラジル人、ベトナム人、フィリピン人などの外国籍の青年、日本籍の青年など約100人が集まり、神学生や修道女も参加して、リオデジャネイロのＷＹＤとつながって祈りをささげた。

当日は、過去のＷＹＤ大会に参加した青年らが体験を分かち合った。また、バンブーダンスやライブ演奏などで盛り上がった後、聖体を顕示し、「テゼの祈り」で静かなひとときを共にした。

参加者は教皇のメッセージを分かち合い、最後は派遣のミサをささげた。

◇「見つけよう！私のミッション」

松浦司教と教区青年たちが分かち合う

みんなが自分の生活の中の気付きを持ち帰れるように

札幌ＪＯＣと教区青年会が共催で、8月31日（土）札幌働く人の家で、松浦悟郎大阪補佐司教の講演が行われた。集まりには青年20名と、勝谷被選司教　祐川神父、神学生1名、ＪＯＣ協力者2名が参加。

札幌教区青年会代表の小山内舞さんが次のような感想を寄稿をしてくれました。

翌日に開催される札幌地区使徒職大会で講師を担当された大阪教区の松浦司教様が、その前日の8月31日の晩、札幌教区と札幌ＪＯＣの青年たちと共に貴重なときを分かち合って下さいました。大変恵み豊かで実りの多い集いとなったので、この場をお借りしてお伝えしたいと思います。

今回の使徒職大会テーマが「なぜ教会は社会問題にかかわるのか」ということだったのを受け、青年が日々の生活で対面する出来事に向き合う機会になればと企画を練りました。働く青年の活動団体であるＪＯＣと札幌教区青年会の初の共催となり、企画段階から一緒に準備しました。教区とＪＯＣからそれぞれ五分五分の青年参加者があり、新たな出会いと共に賑やかな会となりました。

私たちはまず札幌ＪＯＣが昨年札幌市内で行った※ＤＬＩアンケート調査の報告と、司教様の講話を受け、グループや全体での分かち合いを通して、日々の生活の中でどのような出来事と対面しているのか、どう行動してきたのかを振り返り、自分には何ができるのだろうかと一緒に考えていきました。

司教様は相田みつをさんの「トマトとメロン」の詩を引用し、トマトとメロンの様に一人一人に違う良さがあること、だから自分自身を低く評価するのではなく、むしろ、自分だからこそ出来ることがあるのだ、一番〝私〟らしくあるために自分の良い所を輝かせることが大事と気付かせて下さいました。そして、そんな〝私〟を思わず行動させてしまう力が生じることがある。それがどんなにリスクの多い、つらい道だと知っていても。でもそれは

予期せぬ喜びももたらしてくれる。それが自分自身のミッションであると言われ、そういう生き方は幸せな生き方だとおっしゃいました。

参加者たちは自分の日々の生活を仲間たちと共に見つめ直し、司教様の講話に励まされ、気付いたことをこれからの日々の生活の中でじっくりと受け止め、行動に移していくきっかけになったのではないかと思います。私自身は翌日の使徒職大会でも松浦司教様の講話を通して、更に多くの気付きがあり、心が喜びで踊るほどでした。

今回集った全員が神様を通して出会い、分かち合い、多くの恵みで満たされたと感じました。

この企画に関わった方々といつも青年の為に祈って下さる方々に心から感謝申し上げます。札幌教区の青年が教会を通して集いを絶やさず、実を結び、それぞれが派遣されていくように祈りながら、またこのような集まりを企画したいと思いました。

※DLI＝Decent living income（人間らしく生きる為の相応しい収入）

松浦悟郎大阪補佐司教
「教会はなぜ社会問題にかかわるか」を分り易く講演

9月1日（日）に藤学園講堂で行われた札幌地区使徒職大会の講演で、松浦司教は、教会はなぜ社会問題にかかわるのか、という問いはいつもあります。しかし、逆の問いもあります。もし教会が、誰であっても人間の上に起こることに無関心なら、一体何のために教会は存在しているのだろうかと。人の喜びや悲しみ、苦しみに無関心なら、それはイエスの弟子であると言えるでしょうかと・・・。

教会（私たちキリスト者）とは、神との親密な交わりと、世界一致のためのしるし、道具となって働きなさいと言うことです。私たち一人ひとりが教会であり、それぞれが役割を担っています。金持ちの青年の例えのように、ミサに出て、維持費を納入して良い信者かもしれないが、何か欠けているものがあるとイエスは言っています。それは、神のみ旨を宣べ伝えることと、キリストの愛を実現することです。私たちがなすべきことは決まっていますと語られた。長い歴史の中でも、教会は世界に対し、誤った事柄に対して、福音とキリストの心をもって働きかけてきました。神の国を実現するという方向が一緒なら、様々な意見があっても大切にすべきである。そして、事柄（戦争など）が動き出す前に、その方向に向きかけた時に止めないともう止まらない。信仰を生きるとは、自分の居る社会を神の国に近づけることであると述べられた。

ミサの説教では、ブラジルで行われ参加したWYD（ワールドユースデー）リオデジャネイロ大会にふれ、日本のように少数派のカトリック教会の集まりとは違い、カトリック国としての大きな大会にふれたことは、青年にとって、一つの大きな契機になった事でしょうと語られた。

■訃報■

※亡くなられた方々の安息をお祈りください

▽パリ外国宣教会
ローベル・ジュニエ神父
〔略歴〕
1917年　仏国に生まれ、東京近郊の教会で20年間司牧後に来道。1972年から1994年まで八雲教会の主任司祭を務め仏国に戻り、晩年は宣教会の老人ホーム「聖ラファエル」で過ごしていたが、5月13日に帰天。

▽トラピスト修道院
シメオン高橋正行神父
〔略歴〕
1931年1月11日
東京都本所に生まれる
1947年8月27日
厳律シトー会燈台の聖母トラピスト大修道院に入会
1952年4月29日
有期誓願を宣立
1958年6月22日
司祭叙階
2013年12月13日　帰天

クリストフォロ二木彰彦終身献身者
〔略歴〕
1946年8月17日
兵庫県芦屋市に生まれる
1972年5月14日　入会
1975年8月12日
終身献身者の誓約を宣立
2013年7月23日　帰天

▽フランシスコ修道会
ピオ武井薫修道士
〔略歴〕
1926年5月5日
旭川市で生まれる
1969年4月30日　着衣
1970年5月13日
初誓願
1976年5月13日
荘厳誓願
2013年12月3日　帰天

▽マリアの宣教者フランシスコ修道会
Sr.マリア・アグネス田中富子
〔略歴〕
1945年2月19日
旭川市で生まれる
1971年2月2日　入会
1980年3月16日
終生誓願宣立
2013年11月29日　帰天

▽殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会
Sr.マリア・アポロニア吉岡タイ
〔略歴〕
1931年12月30日　誕生
1954年6月5日　受洗
1955年5月31日　入会
1959年1月10日
初誓願
1964年9月23日
終生誓願
2013年11月3日　帰天

■編集後記■

主の御降誕おめでとうございます。

日本カトリック聴覚障がい者の会全国大会が、9月7日（土）～8日（日）に北26条教会と札幌サンプラザを会場に、100名余りが参加し行われました。聴覚障がい者には、防災無線もサイレンも聞こえません。防災のあり方が問われていることを目の当たりにして、共に寄り添うことの大切さを実感させられた。